

## 相模国府・高座郡家

平塚市<sup>しのみや ひがししんど</sup>四之宮・東真土<sup>くりにくりや</sup>周辺の一帯では、「国厨」と書かれた土器や、当時の高級品である<sup>りよくゆうとうき すずり</sup>緑釉陶器、硯や焼印、錠前や帯金具など、一般の集落遺跡では出土しない数々の遺物が出土しており、相模国府が置かれていたと推定されています。坪ノ内遺跡と六ノ域遺跡では、国府の中心施設である<sup>こくちゆう わきでん</sup>国庁の脇殿とみられる建物跡も確認されました。

また、茅ヶ崎市の国指定史跡<sup>しも</sup>下寺尾<sup>てら お</sup>官衙遺跡群（下寺尾西方遺跡・七堂伽藍跡）は高座郡家と推定され、中心施設である<sup>ぐんちゆう しやう</sup>郡庁や正倉<sup>せいそう</sup>のほか、付随する寺院や小出川<sup>こいで</sup>の津（港）が確認されています。



38 相模国府の推定範囲



39 下寺尾西方遺跡で確認された郡庁(左)と正倉(右)

## ▶ 仏教の広がり

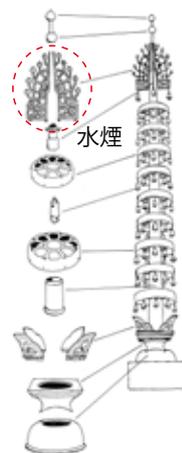
741年の国分寺<sup>みことのみ</sup>建立の詔による国分寺・国分尼寺や、地方官衙に付随する寺などが各地に建立されていく中で、やがて一般の集落にも仏教が広まっています。発掘調査でも、小規模な仏堂を設けたり、焼き物で作った塔や、仏具などが出土する遺跡が見られます。

## 相模国分寺跡・国分尼寺跡

海老名市の国指定史跡相模国分寺跡・相模国分尼寺跡は、海老名駅東側の丘陵上にあります。

国分寺跡の発掘調査では、塔や金堂といった寺域内の各建物が確認され、奈良県の法隆寺と同じ伽藍（建物）配置だったことがわかっています。

相模国分寺の塔は、七重塔で高さが65mもあったとされています。発掘調査でも<sup>きだん</sup>基壇や柱を置いた礎石が確認されており、塔の最上部の相輪の一部である水煙の破片も出土しています。



40 相模国分寺復元模型(海老名市温故館所蔵)



41 相輪模式図と国分寺跡で出土した水煙の破片

## ▶人々の暮らし

一方で、大部分の人々はこれまでと同じ<sup>たてあな</sup>竪穴建物や、<sup>ほったてばしら</sup>掘立柱の建物で暮らしていました。カマドが普及したことで、道具に変化がみられるほか、まじないに使用したとみられる文字の書かれた土器や、県内ではめずらしい<sup>てったく</sup>鉄鐸（鉄製のベル）が出土した遺跡もあります。



42 井戸からまとまって出土した「西」と書かれた土器  
(寒川町宮山中里遺跡)



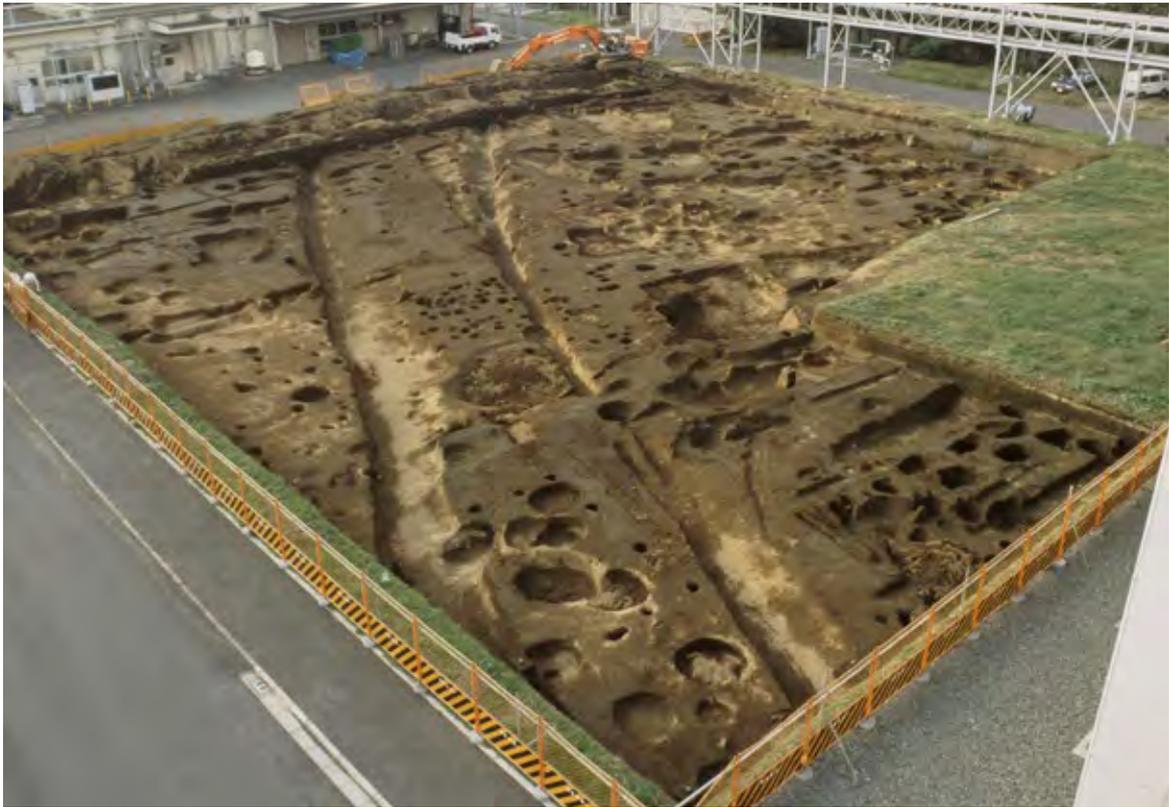
43 竪穴建物内から出土した鉄鐸  
(相模原市緑区中野中里遺跡)

## コラム2 古代の道

官衙や寺院は、迅速に連絡を取り合う必要性から、<sup>とうかいどう</sup>東海道などの「<sup>えきろ</sup>駅路」やそれに準ずる道によって結ばれていました。これらの道は、人が何度も通ることのできた集落内や集落間を結ぶ道とは異なり、幅が広いことや、地形を無視して直線的に延びること、<sup>そっこう</sup>側溝などの設備をもつことなどの特徴があります。発掘調査でも、国府域の平塚市構之内遺跡などで見つかった奈良・平安時代の東海道とみられる幅9mを超える道路などが確認されています。



44 古代の道路・官衙推定位置図

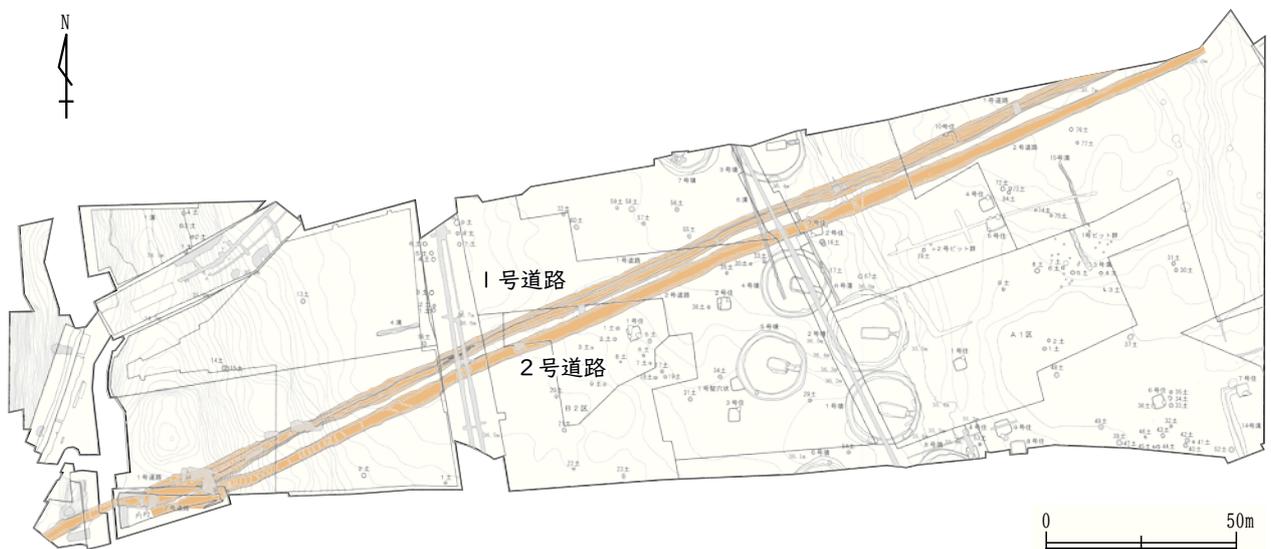


45 構之内遺跡で見つかった推定古代東海道

また、海老名市社家宇治山遺跡では 50 m 以上、厚木市宮ノ越・宮ノ前遺跡でも 300 m 程度にわたって道路の遺構が確認されています。これらの道は、駅路に比べると 3～5 m 程度と幅が狭いものの、まっすぐに延びており、地域内での連絡路として整備された「伝路」の可能性が  
あります。



46 社家宇治山遺跡の道路



47 宮ノ越・宮ノ前遺跡の道路

## 4 川のそばの武士たち

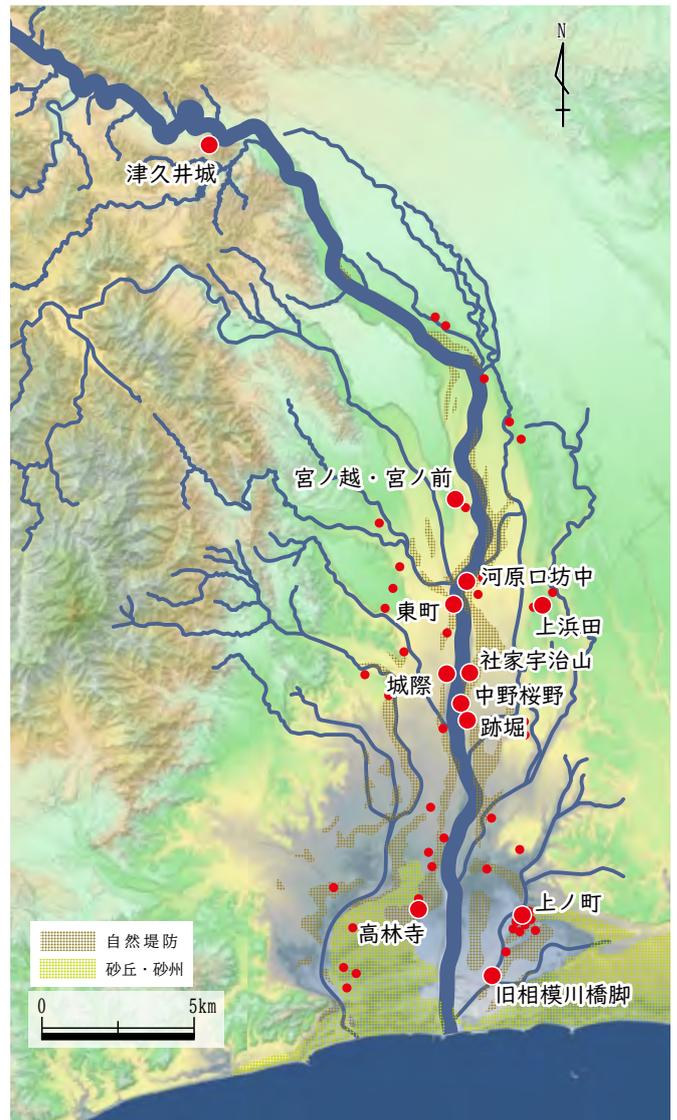
### ▶相模川流域の中世

平安時代の終わりごろ以降は、中央に集中していた権力が弱まり、幕府の置かれた鎌倉をはじめとして、各地に力をもつ者が割拠します。各地域の有力者である武士は、基盤とする地に館を構え、その一族郎党は地域内で大きな力をふるいました。遺跡においても、海老名市の県指定史跡上浜田遺跡などで、武士の居館やその関連施設とみられるものが確認されています。

これまで調査事例の少なかった相模川沿いの自然堤防上でも、中国製の磁器や建物の周りを区画するような溝をもつ遺跡が複数見つかり、館やその関連施設の可能性があります。自然堤防上は、相模川に沿う主要な交通路となっていたことから、武士たちが重視していたことがわかります。

### 中世の河原口坊中遺跡

海老名市の河原口坊中遺跡では、鎌倉時代(13～14世紀)を中心として、堀ともいえるような大規模な溝や、中国製磁器、鎌倉とつながりの深い土器、寺院と関連する瓦や仏具が出土しています。館跡などはまだ見つかりませんが、周辺には中世以前からの社寺や同時期の墓地などが分布し、当時この地に強い影響力をもった海老名氏と関係する遺跡とみられます。



48 相模川周辺の中世の主な遺跡



49 中世の河原口坊中遺跡と周辺の社寺等



50 柱穴から出土した仏具の金剛盤



51 海老名市上郷中世墓群

### 城際遺跡の鍛冶関係遺物

厚木市城際遺跡では、土器・陶磁器・木製品・石製品などに加え、県内では珍しい鉄製品の材料とみられる鉄の板が溝の中からまとまって出土しました。また、鉄を溶かすために炉に空気を送る「ふいご」の羽口や、鉄を溶かした際に生じる鉄滓も見つかっており、遺跡内で鉄製品をつくるための鍛冶を行っていたことがわかります。



52 鉄素材となる鉄の板(鉄錠状鉄製品)の出土状況



53 城際遺跡の鍛冶関連遺物

### 宮ノ越・宮ノ前遺跡の埋蔵銭

この時代は、中国銭を中心とした貨幣が大量に流通し、全国に貨幣経済が浸透した時代でもありました。厚木市の宮ノ越・宮ノ前遺跡では、館や集落などは見つかっていませんが、倉庫の可能性のある地下室が多く確認され、その中の一つから9,700枚以上の銅銭がまとまって出土しています。銅銭は、およそ100枚を一緡として紐でまとめたものが積み重ねられており、全部で100緡ありました。



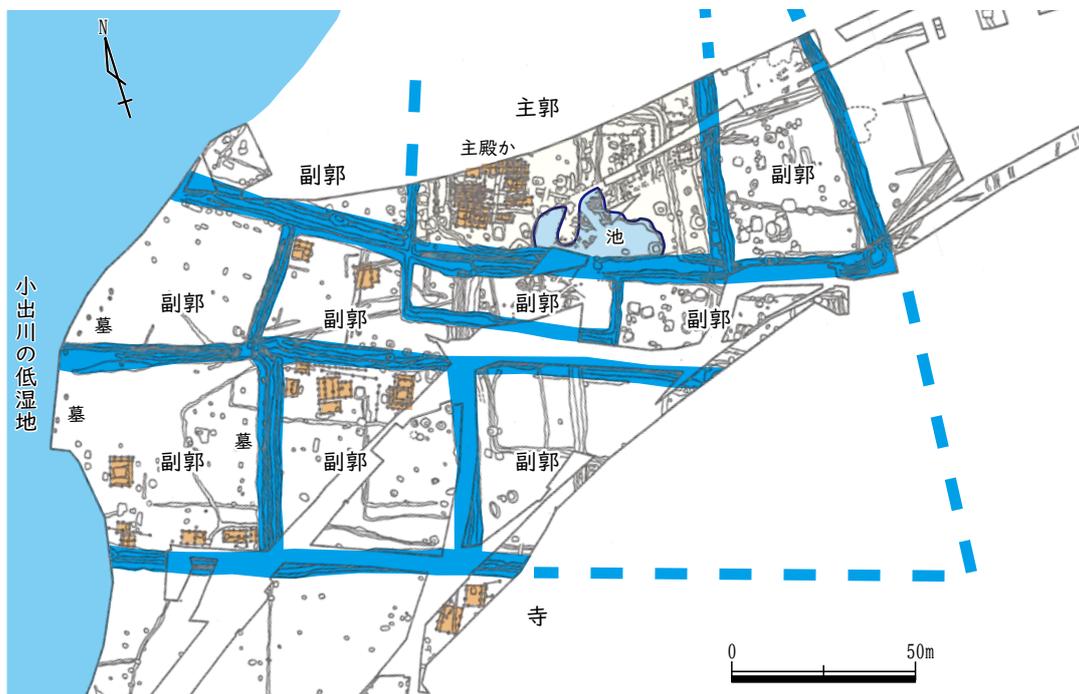
54 宮ノ越・宮ノ前遺跡の埋蔵銭

## ▶ 戦国時代の相模川流域

16世紀、戦国時代と呼ばれる時代には、神奈川県域は小田原に拠点を構えた北条氏（後北条氏）の治める地域となります。相模川の中・下流域周辺でも、北条氏家臣の館とみられる遺跡が見つっています。また、武田氏の治める甲斐との境界付近には、津久井城や八王子城（八王子市）が置かれ、境界を守る城として重要な役割を担いました。

### かみのまち 上ノ町遺跡の屋敷

茅ヶ崎市の上ノ町遺跡では、80 m四方ほどの溝に囲まれた主郭の周りを、50 m前後の副郭がいくつも取り囲む16世紀の屋敷地が見つかりました。屋敷地内では、鍛冶関係の遺物や白木の椀なども出土しており、金属製品や木製品の製作も行われていたようです。北条氏家臣小田原衆の近藤氏一族に関係する遺跡とみられています。



55 上ノ町遺跡の屋敷地

## ▶ 津久井城跡

相模原市の津久井城跡は、北～東側を流れる相模川、南側を流れる串川の合流点付近に築かれた山城です。城の南東側には、甲信方面へとつながる道が走っており、相模と甲斐の境界を守る城としての重要な役割を担いました。

城は標高375 mの通称「城山」に築かれました。山中にはいくつもの細かい平地（曲輪）が造成され、防御施設として尾根筋や斜面の一部を掘り下げた堀切や、土を盛り上げた土塁などがつくられています。



56 津久井城跡の発掘調査状況(馬込地区)



57 津久井城の地形と曲輪

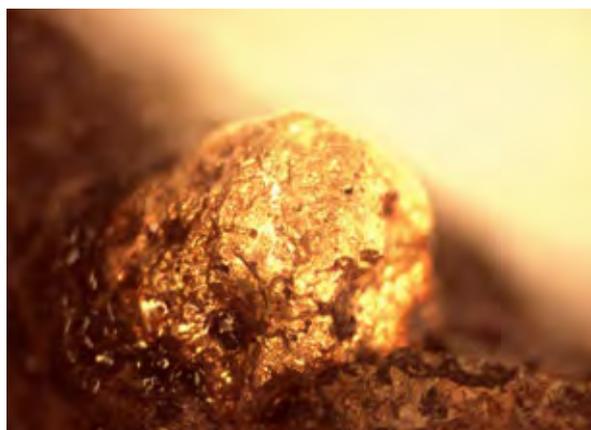
城内に作られた曲輪のうち、「<sup>ほんじょう</sup>本城曲輪群」などの山頂部の尾根筋にみられる曲輪は、戦など有事の際に使用する詰めの城で、「<sup>おやしき</sup>御屋敷曲輪」など山裾の曲輪には、城主である内藤氏が平時に使用する屋敷などが置かれたと考えられています。相模川と串川に守られた堅牢なつくりを誇りましたが、1590年の<sup>とよみひでよし</sup>豊臣秀吉による小田原攻めの際、<sup>とくがわいえやす</sup>徳川家康勢に攻められて落城しました。



58 「本城曲輪群」中の「米曲輪」で確認された石敷遺構

津久井城では1995年から継続して発掘調査が実施され、城に関連する施設や城主屋敷の庭園などの遺構、中国製の陶磁器や小田原城下と共通する土器等の遺物が確認されています。

金属加工に関係した遺構や遺物も見つかっており、釘などをつくるような簡易な鍛冶は城内でも行っていたようです。また、金の精練も行われていたようで、金の粒が付着した土器が出土しています。



59 金粒が付着した土器(左)と金粒の拡大写真(右)(相模原市立博物館所蔵)

### コラム3 川で運ぶ、川を渡る

#### ▶川で運ぶ

相模川は物資の運搬路としても重要な役割を担いました。1574年に北条氏政が建築資材として津久井と七沢の木材を須賀に集めさせた記録もあり、遅くとも中世には相模川が木材の輸送路として利用されていたことがわかります。

丹沢の山々からの木材は、相模川流域の主要な産物のひとつでした。江戸時代の記録などによれば、上流部や支流から運ばれてきた丸太は、現在の山梨県上野原市の新田などで筏に組まれて輸送され、さらに下流の小倉や厚木などの河岸場で集積されてより大きな筏に組み直され、河口の須賀や柳島から海路で江戸などに運ばれました。

材木のほかには、タバコや年貢米、薪や炭などが下流へ輸送されています。中流部には番所も置かれ、通行人を検めたり、積荷の税を徴収していました。

#### ▶川を渡る

道が川を横切っている場合、先へ進むためには川を渡らなくてはなりません。川を渡る手段としては、徒歩や馬などで直接渡る、舟を使って渡る、橋を架けるといった方法があります。現代の私たちが日ごろ使うのは橋ですが、幅の広い川に橋を架け、それを維持することは大変なことです。また、逆に川によって人の自由な往来を妨げることも、戦国時代や江戸時代などにおいては重要であり、大きな河川には橋を架けないことも多くありました。



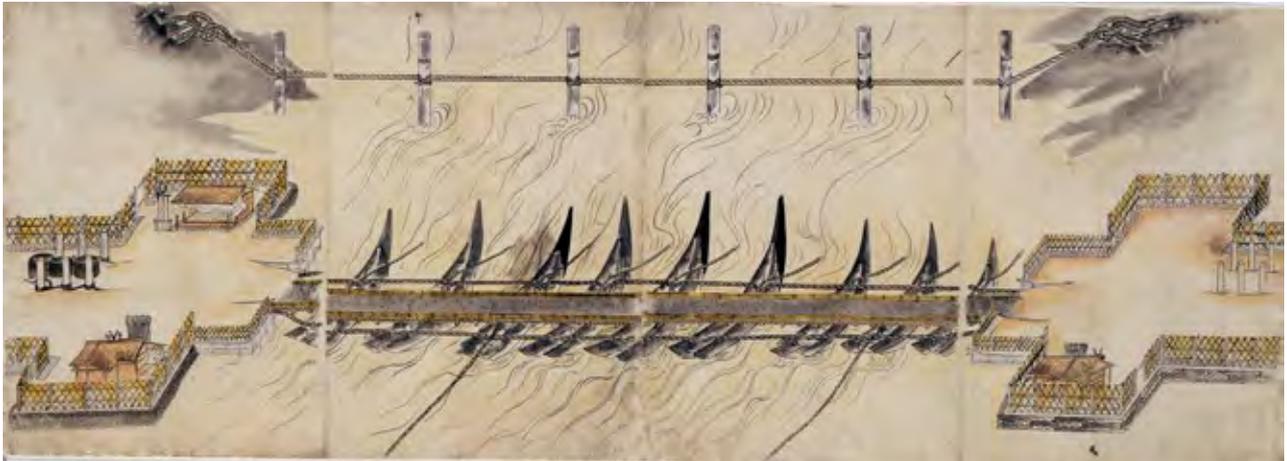
60 江戸時代の相模川舟運・渡し関連位置図



61 鉄舌長錠 (平塚市博物館所蔵・平塚市指定重要文化財)

馬入鉄橋付近の相模川河床で、砂利採取の際に見つかった錠 (乗馬時に足をのせる部分) です。形状などから鎌倉時代の実用品と考えられます。武士が馬で通った際に切れて落ちたものではないでしょうか。

相模川の渡河に関する記録として最も古いものは、『類聚三代格』に所収の835年の太政官符で、「<sup>あゆかわ</sup>鮎河（相模川）の流<sup>うきはし</sup>れが速く渡船に難が多いとして、浮橋を架けることを命じています。また『吾妻鏡』には、1188年に鎌倉から伊豆・箱根方面に参詣する源頼朝のために、「相模河」に浮橋を設けたことが記されています。「浮橋」とは、川岸から対岸まで舟を並べて係留し、その上に板を渡して仮設の橋とした「<sup>ふなばし</sup>舟橋」と考えられ、一度に多くの人数を渡すことができ、設置・撤去も容易なことから、徒歩での渡河が難しい河川で多人数を渡す手段としてよく使われました。江戸時代の相模川でも舟橋が用いられたようです。



62 馬入川船橋図(平塚市博物館所蔵)

相模川の河口付近は「馬入川」とも呼ばれます。

一方、橋脚をもつ橋としては、茅ヶ崎市の「<sup>きゅう さ がみがわきょうきやく</sup>旧相模川橋脚」（国指定史跡・天然記念物）が有名です。この橋脚は、1923年の関東大震災時、地盤の液状化により地中から突き出てきたもので、その後の調査の結果、鎌倉時代のものであることが確認されました。

『吾妻鏡』では1212年に、<sup>いなげしげなり</sup>稲毛重成が17年前に架けた「相模河橋」が破損して不便なため、修繕するかどうかを協議したことの記載があります。この「相模河橋」の橋脚が「旧相模川橋脚」であるかは不明ですが、武士が財を費やして架けた橋も十数年で破損して通行できなくなっていることから、橋を維持することの困難さがうかがえます。



63 関東大震災で姿を現した旧相模川橋脚

このような橋のない場所では、人々は舟を使って川を渡りました。江戸時代の相模川には、主なものだけでも20以上の渡船場（渡し）があり、厚木など主要な街道の渡船場の付近は、市や宿として栄える場所もありました。発掘調査の結果や史料に残る記録から、その形成が中世にまでさかのぼるものもあります。



64 厚木の渡し(『新編相模國風土記稿』国立国会図書館所蔵)

## 5 にぎわう川から川ばなれへ

### ▶江戸時代-相模川が最もにぎわった時代-

江戸時代になると、戦乱の世が終わり、幕府や諸藩が国内・藩内の統治をすすめたことで、耕地開発や交通路の整備が進み、人や物の流通が活発になります。大山参詣などの旅行も庶民の間で流行し、主要街道に置かれた宿場や交通の要衝地は、地域経済の中心地となってにぎわいました。また、商品流通が盛んになったことで一般村落にも肥前磁器など全国各地でつくられた道具が普及しました。

相模川は、河口付近を東海道が横断し、上流域は一部が甲州街道と並行していたほか、江戸から延びる矢倉沢往還や中原街道といった脇往還や、南北方向に走る八王子道など、川を横断する、あるいは川に沿う数多くの道があり、人や物が盛んに往来しました。

相模川自体も、物流の運搬路として重要な役割を担い、甲州や津久井の材木・薪炭、中流域の年貢米や各地の特産物は、川を舟で下り、須賀・柳島で廻船に積み替えられて江戸に運ばれました。



65 相模川周辺の近世・近代の主な遺跡

### 代官守屋佐太夫陣屋跡

16世紀の末から17世紀の初めにかけて、津久井城のふもとは、津久井城主・内藤氏の家臣から徳川家（江戸幕府）の代官となった守屋氏の陣屋が置かれました。発掘調査では、陣屋の建物の柱を支える礎石の跡がきれいに並んで確認され、具足なども出土しています。津久井城跡ではこのほかにも江戸時代の遺物が出土しています。



66 発掘調査で見つかった陣屋跡



67 陣屋跡から出土した具足

あつぎしゆく

## 厚木宿のにぎわい

厚木は舟荷の積替え地点であり、また矢倉沢往還の渡河地点でもあったことから、少なくとも中世末ごろには交通の要衝として宿場が形成されていました。江戸期には大いに栄え、高部家などの豪商も生まれます。渡辺崋山も『游相日記』で「厚木の盛なる都とことならず」と記しており、厚木市東町遺跡の発掘調査でも、往時のにぎわいを彷彿とさせる出土品が確認されています。



68 「巨商居並ぶ厚木」(『游相日記』あつぎ郷土博物館所蔵)



69 高部家に関する出土品(東町遺跡・厚木市教育委員会所蔵)



70 江戸末期の厚木と溝の護岸  
(左) 江戸末期にイギリス人写真家 F. ベアトが撮影した写真。  
街道の中央に溝が走っている。  
(あつぎ郷土博物館所蔵)  
(上) 厚木市東町で水道管敷設工事時に確認された溝の石積み。

## 相模川の堤防

江戸時代の相模川では、記録に残るだけで37回の氾濫があり、特に1859年の洪水では死者や家屋・耕地への大きな被害が出ました。堤防の修築や護岸工事も28回行われ、海老名市の中野桜野遺跡や寒川町の倉見川端遺跡でもこのころの堤防が確認されています。19世紀の『新編相模國風土記稿』には中野村の堤防の高さが「五尺」と記載され、調査結果(1.6m)とほぼ一致します。



71 江戸時代の堤防(中野桜野遺跡)

## ▶近代-川から離れ始めた人々-

開港と西洋文化の移入による急激な近代化の波は、相模川流域にも押し寄せてきました。ガラスやレンガなどが身近に見られるようになる一方で、舟運や渡船、生活用水利用などにおいて暮らしに密着していた川は、次第に人々との直接のかかわりを薄れさせていきます。

### 河原口坊中遺跡の酒造施設<sup>しゅぞう</sup>

海老名市河原口坊中遺跡では、レンガ造りの酒造施設が見つかりました。この施設は江戸時代から昭和初期にかけて酒造を営んだ大島酒造合資会社（1912年まで山田家、1918年まで山田酒造合資会社）のもので、盛期のような絵図としても残されています。発掘調査で確認された遺構では、関東大震災で破損した部分を修繕した痕跡も確認されました。



72 レンガ造りの酒造施設



73 「神奈川県相模国高座郡海老名村河原口山田嘉穀邸宅」(『日本博覧図 第十編』より 個人蔵)

## 生活用水

横浜では、開港による人口急増に対応するため、明治時代中ごろの1887年に国内最初の近代式水道が引かれました。当初の水源は現・津久井湖畔の三井で、鉄管で横浜の野毛に送られました。相模川流域では、その後1936年に寒川、1943年に谷ヶ原<sup>たにがはら</sup>に取水場が設けられ、現在も県内各地への給水を担っています。また、1921年には、愛川から横須賀まで送水する横須賀水道も完成しました。このほか、1940年に磯部頭首工<sup>いそべとうしゅこう</sup>が設けられるなど、農業かんがい用水の整備も進みました。

### 74 出土した初期の送水管

(左)横須賀水道送水管 (大正二年製、厚木市宮ノ越・宮ノ前遺跡)  
(右)谷ヶ原浄水場内の送水管 (昭和十七年製、相模原市川尻遺跡)



## 砂利採取

相模川の砂利採取は、1885年頃、鉄道（東海道線）の敷設に関連して、馬入川鉄橋付近で始まったといわれています。相模川の砂利は良質のものとされ、京浜地域で利用するために河口から道志川との合流点である三ヶ木付近までわたって盛んにおこなわれました。1921年には砂利運搬を目的として相模鉄道（現在のJR相模線）が開業します。当初は茅ヶ崎駅から川寒川駅（寒川駅の西にあった駅）までを結び、1926年には厚木駅（海老名市）にまで延伸しました（その後、橋本駅まで延伸）。

一方で、上流のダム建設による砂利供給の激減と、機械力による採取量の増加から、河床はどんどん低下し、1964年に砂利採取は禁止されました。河床は平均で5mも低下したとされています。



75 寒川町一之宮に残る相模鉄道(寒川-西寒川間)の線路

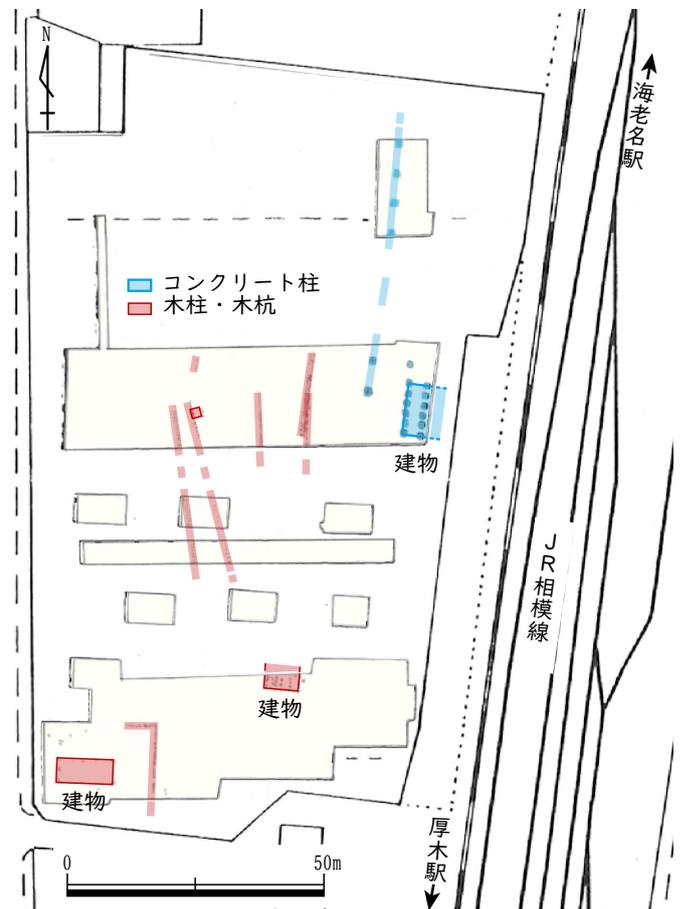
## 「厚木」駅関連遺跡

海老名市四大縄遺跡では、相模鉄道の厚木駅に関連する建物跡とみられる遺構が見つかりました。遺跡はJR相模線の厚木駅の400mほど北側で、線路のすぐ西側の場所から、コンクリート製の柱の基礎や木柱列などが見つかっています。



↑コンクリート柱建物

↑木杭列



76 四大縄遺跡で確認された厚木駅関連施設写真(左、写真下方が北)と遺構全体図(右)

## 発電所・ダム

1907年、現在の山梨県大月市域で国内初の  
大規模水力発電所となる駒橋発電所が稼働し、  
その後1914年には当時の東洋で随一の規模と  
なるハツ沢発電所が運転を開始しました。ハツ  
沢発電所は全長14kmに及ぶ水力発電所で、大  
月市域で取水し、水路で上野原市域まで運んで  
発電します。電気は都心部に送られ、京浜地区  
の発展に大いに役立ちましたが、取水により神  
奈川 - 山梨県境付近の相模川の水量は大きく変  
動し、川の環境が激変したことで、舟運や漁労  
従事者の多くが廃業しました。

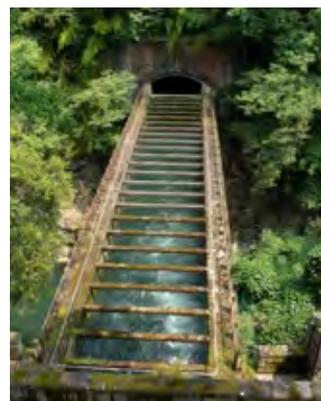
その後も1945年に相模ダム、1970年に城山  
ダムといった、発電と水利用を目的としたダム  
湖がつくられ、現在に至っています。

## 舟運

江戸時代に木材運搬を中心に盛んだった舟運  
は、明治時代中頃にハツ沢村（現・山梨県上野  
原市）で活発に採掘された石炭の運搬でも大い  
に活躍しましたが、鉄道や甲州街道といった陸  
上運搬路の整備や、米から現金への税の変化、  
架橋整備・水力発電所の稼働による川の環境変  
化などによって急速にその役目が失われ、昭和  
初期には消滅しました。



ハツ沢発電所取水口(大月市)



第一水路橋(大月市)



水槽・水槽余水路(上野原市)

77 国指定重要文化財 八ツ沢発電所施設

## おわりに

相模川のほとりに、川とともに生きた人々の歴史が眠っています。その3万年以上の歴史のあいだ、人は暮らしの中で川の存在を無視することはできず、いつも川と真剣に向き合ってきました。しかし近代以降、技術と機械力の進展に伴い、上下水道・交通網・堤防・橋・ダムなどが整備され、人と川とは急速に離れていったのです。私たちは、川の影響を受けないような丈夫な橋、より便利な道路、高い堤防などを築いたことで、より安全で便利な生活を手に入れ、川とのつながりはより希薄なものになりました。

しかし、それらの開発は「遺跡の発掘」というかたちで、川と人との距離がもっと近かったころの記憶を呼び覚まします。現代に生きる私たちも、時には遺跡を通じて「川」を意識してみるのはいかがでしょうか。

## ◆挿図・写真の出典

- 1・16・裏表紙地図：国土地理院『地理院地図Vector』(以下「地理院地図」)より作成
- 3・4・8・11・18・36・48・57・65：『カシミール3D』を使用して作成
- 6：財団法人かながわ考古学財団(以下公益財団法人も含め「財団」)2010『津久井城跡馬込地区』より作成
- 7：田名塩田遺跡群発掘調査団1999『田名塩田遺跡群 I 発掘調査報告書』
- 9：相模原市教育委員会2009『国指定史跡田名向原遺跡 保存整備報告書』
- 10：相模原市教育委員会2003『田名向原遺跡 I』より作成 /14：財団2002『川尻中村遺跡』より作成
- 15左上・上：財団2009『はじめ沢下遺跡』 /15左下：山梨県教育委員会・山梨県土木部2001『塩瀬下原遺跡(第4次調査)』
- 20・21右・24・26：財団2015『河原口坊中遺跡第2次調査』より作成 /27：『福富草紙(模本)』
- 28左：地理院地図・『カシミール3D』・茅ヶ崎市教育委員会2018『下寺尾西方遺跡の調査』より作成
- 28右・39：財団2003『下寺尾西方 A遺跡』 /29：財団2018『倉見川端遺跡第2次調査』 /32・46：財団2011『社家宇治山遺跡』
- 33写真：財団2004『宮山中里遺跡・宮山台畑遺跡』
- 33図：地理院地図・財団2018『宮山中里遺跡IV』・同2015『倉見川登遺跡第1次調査』より作成 /34・54：財団2007『中依知遺跡群』
- 21左・35・72：財団2014『河原口坊中遺跡第1次調査』 /37：財団2009『湘南新道関連遺跡IV』 /38：地理院地図・参考文献9より作成
- 40：海老名市教育委員会所蔵写真より作成 /41左：海老名市教育委員会所蔵図より作成
- 41右：海老名市1998『海老名市史 I 資料編 原始・古代』 /43：株式会社玉川文化財研究所2019『中野中里遺跡』より作成
- 44：地理院地図・参考文献19より作成 /45：平塚市遺跡調査会編2000『構之内遺跡発掘調査報告書』
- 47：財団2014『中依知遺跡群(第2次調査)』より作成
- 49：地理院地図・国際文化財株式会社2013『河原口坊中遺跡第5次調査』より作成
- 51：神奈川県教育委員会1980『神奈川県埋蔵文化財調査報告19』 /52：財団2010『城際遺跡』
- 55：財団2009『上ノ町遺跡II』より作成 /56：財団2010『津久井城跡馬込地区』 /58：財団2011『津久井城跡III』
- 59：相模原市立博物館2020『津久井城跡資料調査報告書』 /60図：地理院地図・参考文献34より作成 /61：参考文献8
- 62：『馬入川船橋絵図』 /63・裏表紙⑨：茅ヶ崎市教育委員会2008『史跡旧相模川橋脚』
- 64：国立国会図書館デジタルコレクション『新編相模国風土記稿、第3輯』より転載
- 66・67・裏表紙⑩：財団2004『津久井城根小屋地区遺跡群』 /68：『游相日記』 /70左：あつぎ郷土博物館所蔵写真
- 71：財団2009『中野桜野遺跡』 /73：『日本博覧図 第十編』 /74左：財団2014『中依知遺跡群(第2次調査)』
- 74右：財団2010『川尻遺跡III』 /76：地理院地図・海老名市No. 47遺跡発掘調査団1998『四大縄遺跡』より作成
- 裏表紙③：相模原市教育委員会2018『国指定史跡勝坂遺跡総括報告書』 /裏表紙⑧：綾瀬市教育委員会所蔵写真より作成
- 表紙人物・25：担当者監修のもと、埋蔵文化財センター 林 美菜保 作画 /その他の図・写真は担当者作成・撮影

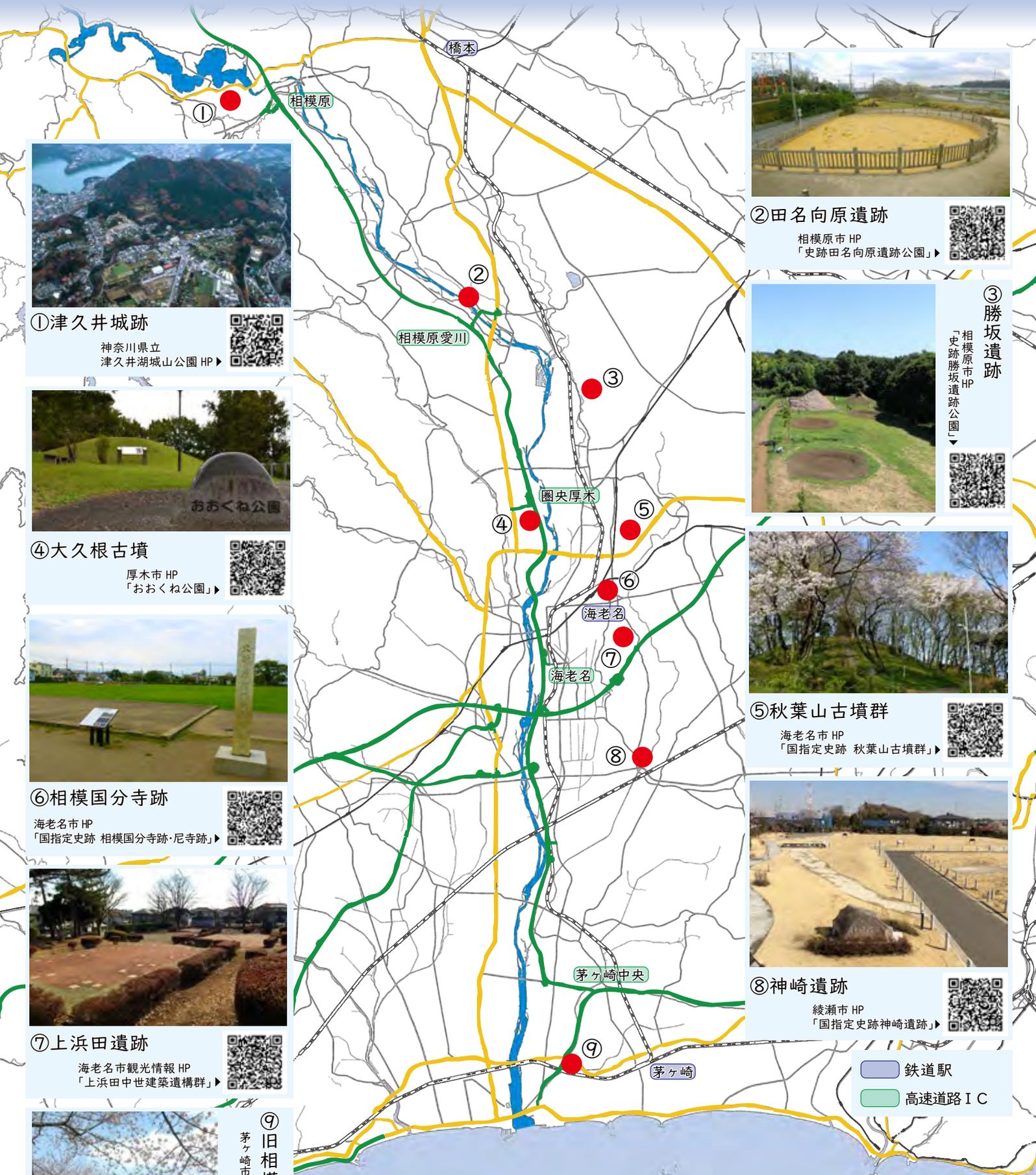
## ◆挿図・写真の提供元

- 7・9・10・58・59・裏表紙②：相模原市立博物館 /15左下：山梨県教育委員会 /27：東京国立博物館Image TNM Image Archives
- 40・41・76左・裏表紙⑤・⑥・⑦：海老名市教育委員会 /45：平塚市教育委員会 /61・62：平塚市博物館
- 63・裏表紙⑨：茅ヶ崎市教育委員会 /68・70左・裏表紙④：厚木市教育委員会
- 73：神奈川県立公文書館(現品個人蔵・公文書館寄託資料) /裏表紙③：相模原市教育委員会 /裏表紙⑧：綾瀬市教育委員会

## ◆主要参考文献(発掘調査報告書及び関連県史・市町村史は原則として省略しました)

- 1 赤沼英男ほか2000『出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通』『製鉄史論文集』たたら研究会
- 2 荒井秀規2017『覚醒する<関東>』吉川弘文館
- 3 安藤久2019『相模川水運の起点となった新田』『郡内研究』30 都留市郷土研究会
- 4 池田治2017『河原口坊中遺跡から出土した板状鉄斧の評価と課題』『西相模考古』26 西相模考古学研究会
- 5 小野正敏編2001『図説・日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 6 川崎保2015『古代信濃の鉄鐸についての一考察』『信濃』67-10 信濃史学会
- 7 河本雅人2006『相模川・桂川流域の縄文時代』相模原市立博物館
- 8 木下良ほか1997『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会博物館建設準備担当
- 9 栗山雄揮2012『相模川から発見された鉄製舌長鏡』『平塚市博物館研究報告 自然と文化』35 平塚市博物館
- 10 栗山雄揮ほか2010『検証 相模国府』平塚市博物館
- 11 公益財団法人かながわ考古学財団2019『相模川中流域の古墳時代を考える』公益財団法人かながわ考古学財団
- 12 国土交通省河川審議会川に学ぶ小委員会1998『川に学ぶ』社会をめざして 報告』国土交通省
- 13 五味文彦・本郷和人編2003『中世日本の歴史』財団法人放送大学教育振興会
- 14 斎藤慎一2010『中世を道から読む』講談社
- 15 佐々木健策2016『津久井城』『津久井町史 通史編 原始・古代・中世』相模原市
- 16 設楽博己2009『総論 食糧生産の本格化と食料獲得技術の伝統』『弥生時代の考古学 5 食糧の獲得と生産』同成社
- 17 鈴木公雄2002『銭の考古学』吉川弘文館
- 18 鈴木靖民2016『古代の愛甲に関する二、三の憶説』『厚木市史』15 厚木市教育委員会文化財保護課
- 19 田尾誠敏1995『相模地方の甲斐型土器覚書II』『東海大学校地内遺跡調査団報告』5 東海大学校地内遺跡調査委員会
- 20 田尾誠敏・荒井秀規2017『古代神奈川の道と交通』藤沢市文書館
- 21 竹内晶子1989『弥生の布を織る』東京大学出版会
- 22 武末純一ほか2011『列島の考古学 弥生時代』河出書房新社
- 23 田中勉2003『海老名の酒造業』『えびなの歴史』13 海老名市
- 24 塚本浩司ほか2020『弥生農耕-田んぼとはたけ-』大阪府立弥生文化博物館
- 25 堤隆2009『旧石器時代ガイドブック』新泉社
- 26 中川真人2020『真・津久井城展』相模原市立博物館
- 27 奈良泰史2019『郡内の地域性を考える』『郡内研究』30 都留市郷土研究会
- 28 西川修一1991『弥生の路・古墳の路-神奈川の場合-』『古代』92 早稲田大学考古学会
- 29 橋口定志2005『東国の武士居館』『戦国の城』高志書院
- 30 早田旅人2009『山と海を結ぶ道』平塚市博物館
- 31 東村純子2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
- 32 平塚市博物館1994『相模川事典』平塚市博物館
- 33 藤原良章2005『中世のみちと都市』山川出版社
- 34 ふるさと歴史シンポジウム実行委員会2006『江戸の娯楽と交流の道 報告書』
- 35 ふるさと歴史シンポジウム実行委員会2007『復元！古代都市平塚』ふるさと歴史シンポジウム実行委員会
- 36 森慎一・野崎篤2016『相模平野地域における縄文海進期以降の古地理の変遷』『平塚市博物館研究報告 自然と文化』39 平塚市博物館
- 37 八重樫忠郎・高橋一樹編2016『中世武士と土器』高志書院
- 38 山口正憲2004『相模湾岸の様相』『東日本における古墳出現について発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会

# 行ってみよう 相模川周辺の遺跡



①津久井城跡  
神奈川県立 津久井湖城山公園 HP ▶



④大久根古墳  
厚木市 HP 「おおくね公園」▶



⑥相模国分寺跡  
海老名市 HP 「国指定史跡 相模国分寺跡・尼寺跡」▶



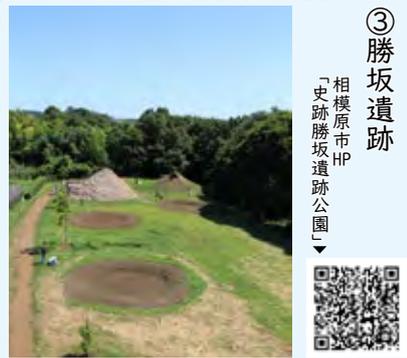
⑦上浜田遺跡  
海老名市観光情報 HP 「上浜田中世建築遺構群」▶



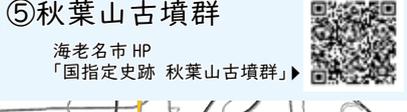
⑨旧相模川橋脚  
茅ヶ崎市 HP 「史跡・天然記念物 旧相模川橋脚」▶



②田名向原遺跡  
相模原市 HP 「史跡田名向原遺跡公園」▶



③勝坂遺跡  
相模原市 HP 「史跡勝坂遺跡公園」▶



⑤秋葉山古墳群  
海老名市 HP 「国指定史跡 秋葉山古墳群」▶



⑧神崎遺跡  
綾瀬市 HP 「国指定史跡神崎遺跡」▶

令和2年度 かながわの遺跡展  
相模川 遺跡紀行 ～3万年のものがたり～

発行日 令和2年12月24日  
編集 神奈川県教育委員会教育局生涯学習部  
文化遺産課中村町駐在事務所  
(神奈川県埋蔵文化財センター)

発行 神奈川県教育委員会  
印刷 亜細亜工業写真株式会社